元人間。元神。今？

ある日のあひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
元人間。元神。今？

【Ｎコード】
Ｎ０９３１Ｚ

【作者名】
ある日のあひる

【あらすじ】
ある日、高校生の人璃心軌は、ついていた。ラッキーだった。だか下校途中に現れた、怪しげな男に君は、もうすぐ死んでしまうと言われる。それは、余りに、理不尽な、必然だった。

一神話　前書き

俺、元、人間。
元、神。
今、？
これが、俺、人璃（ひとり）　心軌（しんき）

現在、？　と言う事になるだろう。？。はてな。クエスチョン。意味不明。理解不可。不可解。摩訶不思議。俺だってそうだ。どうやら、今の俺は、人間では、無いらしい。いや、人間だったが正しいか。　まぁ、人間で無い事に変わりは、無い。
僕は、人間から、神になり。神から？になった。はてなと言うのは、名が無いからだ。いや、本当は、世界中血眼になって探せば、見つかるかもしれないが、そこまでする気には、ならない。
名。元、人璃心軌。今でも、それを名乗っていいのかは、分からない。これは人間だった頃の名のだから。でも、使わせて貰っている。別にこの名前が気にいっていた訳じゃないが、この名前を使って、１６年。今から、新たに付けるのもアレだから……

そう、俺は、一カ月前まで、人間だった。それが、一生続くものだと思っていた。
だが、運命の悪戯か。偶然か。必然か。奇跡か。分からないが、俺の意思とは、関係無く、俺は『神』になった。

二神話　ついている

高校に入って二回目の春と夏の間。その日は、春と言うには、暑く。夏と言うには涼しいそんな日だ。五月中旬の事。学校帰り。下校途中。僕は独り。

今は、学校近くにある書店で立ち読みをしている、漫画、小説、ライトノベル。サブカルチャー。本は好きだ。買うつもりの無い立ち読み。店員には、申し訳ないが、たまに買うので、今日のところは見逃して欲しい。などと、自分勝手の言い訳をし、手ぶらで書店を後にする。いや、手ぶらでは無かった。学校の鞄と、『傘』それが僕の手には握られている。

書店を出ると、辺りは、暗くなり始め、僕の視野に入る人々は、小走りで走る人が多い――雨が降っている。今日の朝見た、テレビの天気予報の降水確率は、０％　それで傘を持っていない人も多いのだ。でも、何故か、僕は、『傘』を持っていた。ラッキーだ。付いている。なんとなく、意識をしないで。無意識で。何故か今日、家から持ってきた、『傘』。ソレを差し、俺は、近くのバス停へ向かう。普段は、自転車で登下校をしているが、今日は、『たまたま』バスで登下校だ。理由は、得に無い。ただなんとく。そう、ただそれだけ。

バスに乗り、家の近くのバス停まで向かう。雨が降り出した事もあり、人がいつもよりも多く乗っていたが、運よく僕は、開いている席に、座る事が出来た。

今日は、妙についている、朝、天気予報の次にやっていた正座占いが１２位だったがやっぱり関係の無いことだ。俺は、占いなど信じてはいない。あんなモノを放送するんだったら、他に放送しなければいけない事が在るんではないだろうか、国によっては、本気で

占いを信じている人が多く居る国が存在すると聞くが、全く、どうかしているんじゃないかと僕は、思う。
そ　んな事を考えながら、バスに揺られること、１５分くらいだろうか、一番家に近い、バス停で僕は降りた。
　此処で降りたのは、俺独りだけ、辺りは、もうかなり暗い。僕の家までの道は、余り人通りが多いとは、言えない。家もそれ程多くは無い。まぁ、手っ取り早く言うと薄気味悪い道だ。一定の距離ごとに在る、電柱。その上には、今にも消えかけそうな、ライトが付いて、弱い光で暗い道を照らしている。その光に群がる、虫達もこの気味悪さに一役買っているだろう。
　だが、俺にとっては、何でも無い通いなれた道だ。恐怖など無い。子供じゃあるまいし、ましてや、俺は、幽霊や、魂なんて、非科学的な物を信じてなどいないのだから。

　傘を差し、歩く俺。勿論足音は、俺独りだけ。他の音といったら、雨音ただそれだけ。ここまで別に何も変では無かった。よく在る日常の風景。
　だが、いつもと違う事が一つある。いや、見つけた。違うと言うより、変だ。電柱の下に誰かが立っている。いや、ただ立っているなら、何も変では無いだろうが、明らかにコイツは、変だ。
　電柱の上に在るおぼろげなライトの光に照らされているその『男』の外見は、Ｇパンに、サンダル、半袖Ｔシャツ。そして、腰くらいにまで伸びている長い長髪、色は、恐らく染めていない黒、髪を頭の後ろで、男に対して余り使いたくは無いが、ポーニーテールにしているらしい。歳は、分からないが、若そうだ。若いと言っても、２０代中盤くらいだろうか？　確かに、外見からして、余り普通とは、言えそうにないが、そんな事よりも、一番気になったのは、この雨の中、傘を差していない状態で、そこに平然の立ち、俺の事をじっと見ている事だった。

三神話　嫌々傘

俺は、立ち止まった。男との距離約、十メートル。
傘を差す俺。傘を差さずまるで雨をシャワーのように浴びて、俺を見つめる男。うっすら笑っているようにも見てとれる。
なんだ、コイツは！？　明らかに異常だ。だか、僕の家はコイツの先だ、だから俺は、止まってしまった足を一歩踏み出す。
動き出す俺。静止している男。視線が気になるが、構わず僕は歩いたが、踏み出して5歩のこと、
「雨が降っているね」
男がいきなり、言葉を放つ。いや、この場には、俺とコイツしか居ない、だとすると、コイツは俺に話しかけたのだ。いきなり――確かに、僕が話しかけられる事を予想していなかったからいきなりになるだろうが、その口調は、まるで、お隣さんの世間話、そんな感じだった。
続けて男は、
「君の傘に入れて貰えるかな」
と、言って、俺の元へと、今まで動かなかった体を、動かす。
俺には、こんな奴、男と、相合傘などする趣味など無い。勿論御免だ。それに、それだけずぶ濡れなら入る必要もないだろ。はっきり言って不快だ。その表情は、俺の顔に出ていただろう。この不可解な状態で全くもって冷静で居られる程、俺は人間が出来ていないつもりだ。これから先、出来上がる事も無いだろう。
そんな俺の事をお構いなしに、男は、俺に近づき頭をかがめ、俺の傘へと入って来る。
「よっと」
「えっ」
驚きの7割、呆れが3割と言ったところか、俺は、声を漏らす。

僕の返答を聞きもせず、傘に入って来た男。今まで、これ程図々しい奴が、俺の人生の中に居ただろうか？

そして、俺の表情を窺うように、顔を見る男。そんな顔を見たくも無いので、下に視線を逸らすと、首には、十字架のネックレス。右手には、数珠のアクセサリーがしてある事に気付いた。全く、西洋が好きなのか、東洋が好きなのか、少し疑問に思いはしたが、今の若者は、そんなの関係無いかと、自分と方がどう見ても若いがそんな事を思った。

「やっぱり、君か――どうだい、ついているかい？」

何の脈絡の無い文。意味が分からない。

「そう、困惑しないでくれよ、君は、ついている筈だよ」

気味が悪い、知らない男にいきなり、自分の傘に入られ、顔を近づけられれば、9割9分7厘位の人は、そう思うだろう。気味が悪いとは思わなくとも、それに近い感情は抱く筈だ。ここであえて、三厘残したのは、普通じゃない奴も世の中には居るからだ、コイツのように。

「すみません、急ぐので」

そう言って、男から離れて、少し数歩、歩いたところで男が、

「あらら、いいのかい、君――死んじゃうよ」

さっきまでの声とはまるで違う、それは俺を憐れむような、そんな声だった。

四神話　蹴り

「死ぬ？」
俺は、不本意だったが、立ち止まり、聞き返した。雨の音が煩かったが、確かにコイツは、俺が死ぬと言った。
男は、
「いや、ゴメン、間違えたよ、『死んじゃう』じゃ無くて、『消えちゃう』が正しかったよ」
その言葉に、「ゴメン」の誠意など一切感じられない。
「馬鹿らしい、貴方に何が分かるんですか？　俺は帰りますよ」
立ち去ろうとしたが、男は、それを止めるかのように、
「すまないね、気を悪くしたかな？　おじさんは、口が悪くてね、でも良いのかい帰っても？」
言葉は、冗談のように聞こえるが、何故か、説得力のある声。俺の知らない事を知っているようなそんな声だ。
何故か、俺は、立ち止まり、男の方を振り向いた。そうしたかった訳じゃないが、そうした方が良いとまるで体が言っているようだ。
「話しを聞いてくれる気になったのかい？　その判断は、正しい。さすがだね、君は、ついているよ」

「少しだけ、聞きます。俺が『死ぬ』ってどういう意味ですか？」
「死ぬんじゃない、消えるんだ。君は、幸か不幸か、『ソレ』に当たってしまったんだよ」
全く理解に苦しむな、コイツと話していると。消えるんだったら不幸に決まっているじゃないか。
「まぁ、信じられないだろうね、信じたくもないだろう？」
そりゃそうだ、初対面に遭った奴に、貴方は消えます、なんて言われて、信じる奴なんて、頭のネジどころか、頭の回路ごと、いか

れているとしか、考えられない。
「う～ん、そうだな～。君にこの話を聞いてもらうには、まず君の今の状況を知って貰うのが良いだろう。うん。そうしよう」
そう言い終わった瞬間、男が、消えた。いや、違う、消えたんじゃない、移動したのだ、俺のすぐ横に、
「えっ！？」
気付いた時には、俺の左に男が居た。居るんじゃなかった、構えている、何を？　脚をだ。速い。普通の人間のスピードでは無い事ぐらいは、理解出来た。
男が、俺の左脇腹に向かって、物凄い蹴りを繰り出そうとしている。その風圧で雨は、今その足から、逃げている。避けている。まるで、雨さえもその蹴りを恐れるかのように。
俺は、動いていない。いや体が反応出来ない。それ程男は、速い。脚が脇腹へと
迫る。襲いかかる――だが、脇腹に当たると思った脚は、俺の体には当たらなかった。いや触れられなかった？　脚は、僕の体に当たる瞬間、一瞬のこと、静止したかのように見えた、いや、まるで、見えない壁にぶつかったかのように。
男は、脚を上げた状態で静止している。右脚のGパン脛の所にさっきまで無かった、穴が開いている。
「やっぱり、こんな蹴りじゃ、傷一つ付かないか、流石だね」
笑う男。嬉しそうに。

五神話　五月

「そう、驚くんじゃないよ、おじさんは、蹴っただけだ」
いや、いきなり、初対面の奴に蹴られると言うのは、普通は、驚くべきことだろう。だが、今は、ツッコミどころが多すぎる。確かに驚くと言うよりは、驚愕のほうが、この状況には、ふさわしいだろう。
そして、男は、上げたままだった脚を降ろし、
「今、驚くべき事は、今の蹴りから、君を護ったのは何なのか、そう思わないかい？」
確かに、俺は、何かに護られたかのように、コイツの蹴りが止まった。コイツの話しからすると、普通の人間じゃないスピード動くコイツの事より、コイツの蹴りを止めた何かの方が重要らしい。
「どうだい、おじさんの話しを聞く気になったかな？」

「その話しが、俺が消える事と関係があるんですね？」
コイツは、信じる訳じゃないが、聞く価値は、あるんではないかと俺は、判断した。
「モチロン」
男は、笑う。不敵な笑みだ。
「じゃぁ、こんな天気で、外で立ち話もなんだから、おじさんの家へおいで」

そして、俺は、コイツの家へ案内された、筈だったが、十数分後着いた先は、もう、随分前に廃れたであろう、神社だった。鳥居の前に在る、二匹の狛犬のうち片方には、頭が無い。鳥居をぬけて本殿へ続くであろう石畳の上？　恐らく上だが草で石畳が見えない程伸びきっている。そして、ボロボロの本殿。
「いやーこの町に来て、住む所をどうしようと思っていたが、中々

良い物件が見つかって良かったよ」
まさか、思ったが、まぁこの男ならあり得るかと納得をした。
「まぁ、汚い所ですが、どうぞ」
中へと案内される。一応、
「お邪魔します」
中は、電球が一個付いてあり、床には、寝袋、ガスコンロとその上に置いてあるやかん、近くには、カップ麺が数個置かれている。そして、ロープを張って作った、物干し竿？　には、ハンガーに掛った数種類の衣類。どうやら、コイツは、本当に此処に住んでいるらしい。
「まぁ、適当に座って、くつろいでよ、おじさんは、ちょっと着替えるからね」
僕は、床であぐらをかく。どうやら、一応掃除は、したらしい、ところどころ、穴は開いてはいるが、埃は、付いていない。
「いやーお待たせ」
着替えを済んだ男が、俺の目の前へと座る。またGパンに半袖のTシャツ。
「さてさて、何処から話そうかな」
もったいつけるように、男は、言う。
「そうだね、まずは、自己紹介から始めようか、おじさんの名前は、木〇拓也そうだね、略して、キムタクとでも、呼んでくれても良いよ」
確信。絶対偽名だ。
「おや、気にいらなかったかい、じゃぁ、香〇慎吾の方が良かったかい、じゃぁ、略して、慎吾ママとでも呼んでくれ」
どこが略されている！？　しかもそのネタは、今の高校生には、恐らく通じる奴は、そうは、居ないぞ。
「他にも、稲〇五郎、イワコデジマ。中〇正広、ブラックバラエティ。どれでも、好きなモノで呼んでくれたまえ。ズバリ、おススメは、やっぱり、キムタクかな」

おいぃ！　一人たらないぞ！　ここまで言ったんだ、草〇剛さんも入れてやれよ！　五人揃っての、ＳＵ〇Ｐだろ！
「ちなみに、誤解しないで欲しいのは、おじさんは、邪弐延厨（ジャニ〇ズ）は、好きじゃないからね」
思いっきり、悪意の籠ってる、当て字だ。文字の中に厨二を入れてやがる。相当だ。
俺は、呆れ気味に、苛立ち気味に、
「真面目に言ってくれないのなら、帰りますよ」

「いや～ごめんね、昔、家を出る時に、その時まで使っていた名を捨てて来たんだよ、それでね、そのまま良い名が付かず、適当に偽名使っていたんけど、君には、失礼か。じゃぁ、今付けよう、今なら、なんとなく、良い名が付けられそうだ。そうだなぁ～、雨、五月、神社、ガスコンロ、カップ麺……」
コイツ、本当に、名前を考えているのか？
「五月……サツキ。サツキ。うん。サツキで行こう。どうかな、え～と」
「人璃（ひとり）　心軌（しんき）です」

「人璃君ね、中々変わった名前をしているね」
今、名前を決めた奴には、言われたくは無い。
「サツキ、良い名とは、思わないかい？　五は、五体満足、体を意味し、月は、闇を照らす光。つまり、この体で、闇を照らそうと言う意味が込められている。我ながら、中々の出来だ」
腕を組み自画自賛する男いや、サツキ。確かに、今付けた割に、意味まで込めるとは、口が達者と言うかなんと言うか、まぁ、キムタクよりは、マシだ。

六神話　サツキ

「それじゃぁ、改めてまして、サツキだ、齢(よわい)は、２６。君は、見たところ、高校生かな？」
制服姿の俺を見て、言う、サツキ。そりゃそうだ、高校生じゃ無いのに、高校の制服を着ている奴なんて、まず、居ないだろう。
「ええ、高２年です。それより、サツキさん――」
サツキは、手を広げ、僕の顔の前に突き出す。
「人璃君。おじさんを目上の人と見て、さんを付けてくれたのは、いいけど、君から『さん』を付けて貰うのは、少々気が退けるな。くだけて、サツキで構わないよ」

「えっと、それじゃぁ、サツキ。そろそろ、教えてくれないか、さっきの事と、俺が――」

「消える事かい？」
俺のセリフを奪うサツキ。見透かされているのか。
俺は、黙って、頷く。
それを見たサツキは、立ち上がり、一度後ろを向き、そして、振り向き、
「いいよ、教えてあげよう、君が、それを望むならね」
嗤っているように見えた。
「少し、長くなるけど良いかな？」
ここまで、連れてきといて、今更、時間など気にはしない。
「ええ」

「そうかい、じゃぁ、始めるとしようか。まず君は、神様を信じるかい？」
唐突な質問だが、俺の答えは、とうの昔に出ている。

「いや、信じてない」
続けて、サツキは、
「じゃぁ、幽霊は？　魂は？」
「そんなモノある筈が無い」
「はは、ある筈が無いね、人璃君。君は、随分自分勝手な言葉を使うね」
笑っている、サツキ。見下している。サツキ。
「完璧だね、思った通りだ。いや、そうでないと、おかしいね。必然とでも言うべきかな」
「一体、アンタは、何が言いたいんだ」
「その、君の、確固たる意志が、君を消すのさ」

七神話　信仰

「ああ、君は、神様を信じていないんだろ、つまり，君は、無神論者。そう言う事になるのかな？」

「消す？」

「まぁ、そう言う事になる」

確かに、僕は、初詣にも行ったこともあるし、仏壇に手を重ねた事もある。だか、それは、ただの行為でしか無く、何も、神や仏を信じている訳じゃない。

そう、成り行き。みんながするから、仕方なく、自分もする。ただの行為に過ぎない。何もそんなのは、俺だけじゃなく、日本全国に大勢でも居るであろう中の一人だ。

「随分、冷静に聞いているね」

まるで、もっと。他の言葉を言われると思っていたのだろうが、自分が消えると言われる話しは、俺は、半分以下程度にしか聞いていない。

「ここからの話しは、今の君の固い頭じゃ理解出来ないかもしれないけど、聞いてくれるかい？」

「ああ」

「そうかい――神様の言うモノはね、信仰で生まれるモノも多いんだよ、人々の思い、想いが重なり、重くなり、神が生まれる事もある。まぁ、神様にも、色々種類があるから、一概にそうとは言えないんだけどね。宗教が出来てから生まれた神様ってのも、多いんだよ、そう言う場合は、宗教が神様を生んだとも言えるかな」

「そして、これからが君の問題に入る訳だ。普通の宗教なら問題は無かったんだ、でも、『コレ』という、特別かつ異質な『モノ』だから、問題が発生したと言っていい。現代は神を信じ無いモノが多くなったそうだろ君のように」

確かにそうだ、僕の知る限り本気で神を信じている奴は居やしない。

「神を信じ無い者。その人達が多くなり、新しい信仰が生まれたと言っていい。『神は居ないと信じる信仰』、その思い、想いは、重なり、重くなり、大きくなり、強くなり。その強い信仰から、神様が生まれてしまった」

「はぁ？　百歩譲って、神が居たとして、何で、神が居ない想いから、神が生まれるんだよ」

さっき、サツキが言ったように俺には、理解出来ない。

「だから、さっき言ったろ、神様は、信仰で生まれる、神様が居ないと信じる強い想いが、神様を生んでしまう。矛盾のように聞こえるが、人間の意志は、それ程に力を持っているんだよ」

「いや、この場合は、『神にさせてしまった』と言うのが正しいかな。人璃君、人間から、神になった人を知っているかい？」

それくらいは、知っている。信じては無いが、

「イエス・キリストだろ」

「その通り、つまり。人間も神様になれるのさ、無から神が生まれる事もあれば、人、もしくは、動物、物だってあり得る」

「幸か不幸かを決めるのは、君次第だが、この『神が居ないと信じる信仰』は、人を選んだ。モチロン、同じ考えを持つ者を選び、たまたまか、偶然か、はたまた、奇跡か、必然か、運命神の悪戯か、それは、分からないが、御神体として、とある高校生を選んでしまった訳だ」

ここで、ようやく俺は、コイツの言いたい事を二割程度は、理解したと思う。

「それって……」

「そう、君は、神様になったのさ」

八神話　日本刀

「そう、君は、神様になったのさ」
サツキは、そう言った。俺の予想通りの答えだったが、理解出来ない。難題難問。意味不明。日本語の意味、自分の耳さえ疑った。
「はは、信じられないというか、訳が分からない、理解出来ないと言ったところかな？　まぁ、そりゃ、そうだ、これを一度聞いただけで理解出来たのならおじさん、びっくりしちゃうよ」
相変わらず、サツキは、気楽な口調。そんなサツキがさらに僕を混乱させているのかもしれない。
「何を根拠にそんな事を！」
やっと見つけた言葉がコレだ。
「根拠？　さっきの僕の蹴りを止めたのは、君自身の力さ。意識はしなくとも、神の力は、君を護った。常人が食らったら、ただでは済まなかったであろう蹴りから、オートで君を護った。さすが神様、人璃様と言ったところかな」
そう言うと、サツキは、電球の光が余り届かない神社の奥へと、歩いて行く。
「まだ、信じられないか……まぁ、仕方のないことかな」
サツキは、床に手を伸ばし、何かを取ったようだった、何かは、薄暗くて分からないが、細長く光っている。
「これならどうだい？」
あの時と同じだ、また消えたように見えた。でも分かっている移動したのだ、また俺の目の前に。
サツキが俺の近くに来てから気づいた、先ほどの細長く光っているモノは、日本刀だったという事に。そしてサツキは、刀を頭上に構え、僕を一刀両断しようとしている。
「えっ？　わぁぁぁぁぁぁぁぁ」
振り下ろされる刀。普通なら、死ぬのであろう。でも――刀は、

キン！

金属音が、この本殿の中に響く。普通ならあり得ない。刀は、俺の着衣ギリギリまで来たが、服さえも斬れる事無く、刃先が折れ、サツキの後へと回転にしながら飛んでいき、床に刺さった。

そして、振り下ろした、状態だったサツキが、僕に顔を近づけて、

「ホラね、分かったろ。もう君は、人間じゃぁないんだよぅ」

九神話　七日間

刀を振り下ろしたサツキ。刃先の折れた刀。無傷の俺。サツキの言葉――君は、もう人間じゃない――現実では、考えられない事が、目の前で起こっている。まるで、絵空事のような事。まるで夢のような――

俺は、一筋の光希望と考え、ゆっくり右手を頬にやる。

「残念。夢じゃないよ『神様』」

痛かった。僕は、座ったまま俯いた。まるで、力が抜けて糸の切れた操り人形のように――認めたくない、現実が目の前、違う自分自身に在る。コイツの……サツキの話しを信じるしかないのか……神を信じていなかった奴が神になる。全くおかしな話だ。人間という存在じゃない事が、こんなに悲しく、悔しい事だったとは――

「なんで……俺なんだ――」

僕から、数歩下がった、サツキが、

「誰でも良かった、神を信じていない者なら。その資格は在った、たまたま君がなってしまった、ただそれだけの事だよ」

「サツキ」

「ん？　なんだい、人璃君」

「俺が消えるってどういう事だ。これと、関係があるんだろう」

声に力は、もう無い。聞くのは、怖かったが、聞かずにはいられなかった。

「君は、『神様なんて居ないと信じる信仰』から生まれてしまった神だ。つまり、その人達は、神様なんて居ないと思っている、願っている、という事は、神様はその願いで消えるのさ。君は人々の想いで生まれ、人々の想いで消される。儚いことだね」

「何でアンタにそんな事が分かる」
怒りに似た感情と、憤り。
「おじさんは、そう言うモノを『専門』に扱う者だからね」
「サツキ、お前は、一体何者なんだ！？」
「時と場所、時代、土地、国によって、おじさんみたいな人は、色々な言われ方をするね、超能力者、魔法使い、陰陽師、超人、化物……まぁ、一番分かりやすいのは、霊能力者ってのが、一番ポピュラーでこの場合は、相応しいだろう」
霊能力者か、数時間前までは、存在を全否定していたが、今となっては、肯定するしかなさそうだ。
聞きたくは、無いが聞くしかない。
「僕は、いつ消えるんだ？」
震えた声だ、恐怖、絶望。
「おじさんは、そこまでは分からないけど、君は、分かる筈だよ、神様だからね、自分の消える時くらいは、思い浮かべれば分かる筈だ」
「……」
分かった、何故か。いいや、初めから知っていたかのように、海馬の中に大切にしまってあったモノを引き出したように。当たり前という感覚の違和感。
「七日後の午前零時……」
「そうかい、君は、その時消えるのかい。始まりには、終わりがある、それは、神様とて例外じゃない」
憐れんだ声。
「あと七日間、君は、人璃心軌として存在するのか、神様として存在するのか、君次第だ、それまで、御機嫌よう」

十神話　帰宅

俺は、神社を後にし、家へ帰った。
「あっ、心兄(しんにい)どこに行ってたの？」
妹が出迎える。無邪気な顔。やけにそれが辛かった。
「ああ、巫心(みこ)ちょっとな、母さんに飯は、食べて来たから、いらないって言っといてくれ」
食欲にんてモノは、無い。
そして、二階の自分の部屋へ行き、倒れるように、ベッドに横になった。
頭が痛い。無理もないか、俺の頭でアレを全て理解するには、酷だ。神様になったなら、もう少しＩＱがあと百位増えないもんかよ。

確か旧約聖書の創世記だと、神が七日間でこの世界を創ったんだっけ？　今まで全く信じていなかったけど、もしかしたら、合っているのかもな――それに比べて俺は、あと七日間で消えるのか――
自然と笑いがこぼれた。呆れるような、そんな感じに。
俺が消えたとしても、何も変わりはしないだろうな、両親と妹の三人家族になって――妹の方が、俺より、勉強も運動も出来るし――学校には、友達も居ないし。
だから、選ばれたのかもしれない――

落ち着いて、考えると、余り恐怖が無い。これも神様なのだからか、もともと、そう言う人間だったからか、今の俺には分からないけど。
サツキは、「あと七日間、君は、人璃心軌として存在するのか、神様として存在するのか、君次第だ」なんて、言っていたけど、自分何が出来るかなんて分からないし、分かる事と言えば――あと七日で消える事くらいか。

「無神論者が神になる。いい加減な世界だ」

十一神話　独り

『あんな事』を言われた次の日の朝。いつも通り、七時起床。カーテンを開ければ、素晴らしい五月晴れ。アレが夢であればいいと思った。だが、夢じゃないと何故か理解出来る。きっと神だからなのだろう。

目に入った、机の上に在るカッターナイフを手に取り、左手の甲に軽く振り下ろす。

キン！

「やっぱりな……」

刃先は、折れた。予想通りに。

確かに、アレが全部夢ならば、ブルーレイディスクも真っ青なハイビジョンな夢だ。

僕は、今日、普通通りに学校へ行こうと思う。家に居てもする事は、無いし、家族に心配されるのも嫌だったから。

リビングに降りると、妹が一足早く、朝食を食べている。いつもの事だ、コイツは、部活の朝練があるから、いつも、学校へ行くのは、僕よりも大分早い。

リビングにあるテレビからこの町のニュースが流れる。『まただ』内容は、器物破損。よくある事。この町では。普通の器物破損では、こんな全国ニュースで流れる事では無いだろうが、『これ』は、異質だから、マスコミも面白がってよく取り上げる。今日は、切断された電柱。こないだは、車だったけかな？　どうやら、昨日の夜に電柱は、随分細かく切断されたらしい。ありえない事だか、まるで刃物で斬った様な切り口。どうやって斬っているかは、警察も専門家もお手上げだ。だから、ニュースで取り上げられる。始まったのは、今から約一年位前だっただろうか。そして、付いたあだ名が、

物斬り通り魔。（ぶつぎりとおりま）

そしていつもの学校。変わらない、変わったのは、俺だけだ――そう言えば、僕は、いつから神になったんだ？　昨日？　それよりも前？　まぁ、どうでもいいか。

教室に着けば、朝から、高校生達の青春の声が耳に入る。俺には関係無い。教室という空間に俺は、独りだ。独りというのは、普通なら、友達、仲間、クラスメイトなどで構成される、コミュニティ、チーム、グループに俺は、何処にも属していないから。いや、もしかしたら、属しているのかもしれない。『アイツ』が居るのだから。

もう一人このクラスに独りの奴がいる。コミュニティ、チーム、グループ何処にも属しては居ない。女子。つまり、独りという者が二人いる事になるから、周りから見れば、似たように映っているかもしれない。まぁ、俺とは、全く違う人種だが、成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗、絵にかいたような優等生。この学校で一番有名であろう、『宮本サヤ』。

ソイツが俺と同じ独りの奴。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0931z/

元人間。元神。今？

2011年12月5日20時07分発行